

P10-97

婦人科手術後、腹腔ドレーン留置により女性患者が抱く不安

前橋赤十字病院 看護部 産婦人科病棟

○鈴木^{すずき} 利恵^{としえ}、長野 聖子、田村 教江

【目的】開腹手術後・腹腔鏡下手術後に、ダグラス窩ドレーンや皮下ドレーンを留置するケースが増加している。ドレーンを留置した患者は、「怖くて見ることができない」「これを下げて歩くのは躊躇する」などを訴えることが多い。婦人科手術を受ける患者は、女性生殖器の手術となるため、その手術自体が女性としてのアイデンティティをゆるがす要因の一つとなる。そのため、ドレーンが入っているという現実、さらに不安をもたらすことになる。そこで術後ドレーン留置に対する女性患者の不安にはどのようなものがあるかを明らかにし、効果的な看護師の関わりを考察した。

【方法】婦人科の開腹手術、腹腔鏡下手術後、ダグラス窩ドレーン・皮下ドレーンが留置された患者18名に対してインタビューガイドを用い、半構造的インタビューを実施した。

【成績】術後腹腔ドレーン留置に対する女性患者の不安には14カテゴリーが形成された。

【結論】14カテゴリーの不安から以下の5つの特徴とその看護が導き出された。5つの特徴にはドレーン留置による羞恥心や異性に見られるという抵抗感、血液に対する負の心理状態、術後の生活動作における苦痛や不安、ドレーントラブルの恐怖感、術後の回復に関する不安であった。その看護としては、術後面会への配慮、人目に触れないよう、血液が見えないようにドレーンバックを斜めがけにするなどの下げ方の工夫、患者の思いや生活状況を確認するなどの声かけ、定期的な排液の破棄の他に患者本人の希望に添った排液の破棄、患者がドレーン留置による生活動作や術後経過のイメージができるよう看護師の統一した説明が必要であると考えられた。